II　植民地革命の狼煙

これがワシらの回答だ

さあどうした
ダンナさんよ
ふるえてんのかよ
いつもの空威張りはどこいった
ムチをもたんと
声も出んというのかよ
野蛮で無知で賤しくて
ずるくて不誠実で血なまぐさく
盗みぐせが抜けずに信用できない
迷信深くて残虐で
人喰い人種で吸血虫
移り気で野卑な臆病者とは
テメエがワシらを罵倒して
投げつけてきた
言葉ではなかったかい
さあもう一度言ってみろ
キリスト様に仕えるように
汝の主人に仕えるべしだと

冗談言っちゃいけねえぜ
白人は主人なるべく運命づけられ
黒人は奴隷なるべく運命づけられ
ているだと
冗談言っちゃいけねえぜ
テメエらに奴隷にされる前
ワシら自由な人間だったのよ
テメエら腐った人間以上に
誇り高き人間だったのよ
他人の労働に寄生して
ムチふり回してふんぞり返る
テメエら奴隷主こそ
人間以下の腐りキンタマよ
オメエがワシらに投げつけた
罵倒の言葉をそっくり
オメエさんに返してやるぜ
さあ仲間たち
容赦はいらねえ
日頃の怨みを束にして
思いっきり痛ぶって

おっ吊してしまおうぜ
八裂きにしてしまおうぜ
これがワシらの回答よ
奴隷船のなかで殺されて
海の藻屑と消えた仲間の
海より深い怨みを
ワシら決して忘れんぜ
奴隷市場でさらし者にされ
品定めされたときの屈辱を
ワシら決して忘れんぜ
日の出前から狩り出され
日没まで酷使され
血と汗と涙を
搾りとられた苦しみを
ワシら決して忘れんぜ
さあ仲間たち
白人奴隷主は皆殺しだ
皆殺しにしたって
ワシらの怒りはおさまらないぜ
さあ　やっちまえ

一人残らず吊してしまえ
奴らの家に火を放て
奴らの町に火を放て
奴らの国に火を放て
これがワシらの回答よ
鉄拳の次は火だ
そして暴動だ
革命だ
これがワシらの回答だ

一九七九・五・二〇

拷問

少年は銃口をつきつけられて
こずき廻され
銃床でなぐりつけられ
頭から血を吹き出し
その場にくずおれた
だが少年は一言も発せず
その水晶のように澄んだ眼で
なおもなぐりかかる
奴らのその泥水のように濁った眼を
射つくした
　この虫ケラめ！
　一人前ににらみつけやがって！
　ぶっ殺してやる！

闇の中の長い旅を終えて
少年が眼をあけた時
そこはたぶん奴らの前線本部だった
すえた臭いのする土牢の中の
湿っぽい地面の上に
両手両足を
針金で堅く縛りつけられていた少年は
疼くような全身の痛さを覚えつつ
その痛さに
今にもちぎれそうな意識で
奴らが近づいてくる足音を耳にした

少年は逆さにつるされていた
陽は高く昇り
時々牛の鳴き声が聞こえてくる昼下り
大粒の汗をしたたらせた奴らは
片手でビールをラッパ飲みしながら
逆さづりにした少年に
何度も何度もムチをあてた
ビシッ・・・
ビシッ・・・
ビシッ・・・
ムチがあたるたびごとに
少年の体は右に左に空を切った

さあしゃべるんだ！
　名前を言え！
　生まれはどこだ！
　所属部隊名を言え！
　だれに命令された！
　本隊はどこだ！
　どんな武器があるんだ！

油のなくなったランプの炎のように
消えゆく意識の中で
少年は父の最期を思った
敵陣に突撃し
手榴弾で敵の機関銃座を撃破し
味方の血路を切り拓いて
戦死した
父のその勇姿を思った

闇の中の長い旅を終えて
少年が眼をあけた時
そこはひんやりとした
薄暗い地下室だった
少年の衣服は全てはぎとられ
真っ裸にされた少年は
背もたれのある堅い木のイスに
手足を針金で縛りつけられていた
　さあしゃべるんだ！
　名前を言え！
　生まれはどこだ！
　所属部隊名を言え！
　しゃべらんとどうなるかわかってるんか！
　一生女をだけなくなるんだぞ！
　それでもいいのか！
少年のむき出しになったペニスに
電極を近づけ
卑わいな笑いを浮べながら
奴らはツバを吹きとばしてわめいた
　だれに命令された！
　本隊はどこだ！
　何人いるんだ！
　どんな武器があるんだ！

激痛が
少年の下半身から上半身へと
津波のように駆け抜け
少年のしなやかな体は
エビのように丸くなりながら
せり上がった
そして少年の意識は
ちぎれ雲のように消えていった

闇の中で少年は
光輝く母に会った
少年を逃がすために
盾となって奴らに殺された
母の最期の姿を見た
そして少年は聞いた
　戦いなされ
　必ず父ちゃんと母ちゃんの
　カタキをとりなされ
　同胞たち皆んなの解放のために
　奴らを滅ぼすために

闇の中の長い旅を終えて
かすかに一条の光がさしこんだ
薄暗がりの中で
少年が眼をあけた時
奴らの姿はなく
独り拷問部屋にとり残されていた少年は
かすかな銃声を耳にした
ダダダ
ダダダダ
ダダダダダ
それは確かに銃声だった
しかもそれは聞き覚えのある銃声だった
その独特なリズム
胸の底からはじける怒りのリズム
不敗を誇る勝利のリズム
ダダダ
ダダダダ
ダダダダダ
しだいに近づいてくるその銃声は

まぎれもなく同志たちの
奴らに向けられた銃口からはじき出る
あのなつかしい銃声だった
ダダダ
ダダダダ
ダダダダダ

一九七九・一・二一

赤いネッカチーフ

恋人よ
君に赤いネッカチーフを送る
前に僕が出撃した時
敵弾を受け
傷ついた僕の血に染った
赤いネッカチーフを
君に送る
明日の出撃を前にして
いま僕は思い出にひたり
君への手紙をしたためている
あまりにもたくさん
君に話したいことがあるために
僕の筆は遅々として進まない
二人だけの秘密の洞窟で
初めて
君への想いをうちあけた時
君はためらわずに
受け入れてくれたね

覚えているかい
君の肩をそっと抱いて
初めて
君のさわやかな唇に
口づけをした時
君は一筋の涙を
流していたね
そして君は
野に咲いていた
一輪の花を手折って
僕の胸にさしてくれたね
それから奴らがやってきて
村は焼かれ
村人(ムラビト)は殺され
大地は奪われ
僕たちは着のみ着のまま
逃げざるを得なかった
あの苦難の旅の
飢えと渇きの日々
そして僕たちは

誓い合ったね
必ず奴らを打ち負かし
殺された村人を弔らって
大地を
僕らの楽しい生活を
青春を
奪い返すために
戦うことを
そして僕らは
解放闘争に志願した
君も僕も
前線任務に志願したのに
君は後方任務に回された
離ればなれになってしまう
別れの辛さと
厳しい訓練の苦しさを
奴らへの怒りと
君への熱い想いで
乗り切った僕は
その辛さと苦しみを

一人前のゲリラ兵士になった
喜びと誇りにかえて
そして
初めて敵を殺した時の
あのやるせない
悲しみ色の喜びを
一篇の詩に托して
君に送ったね
あれからもう二年
汗と泥と硝煙の中で鍛えられ
育くまれ成長した
君と僕の二年
決して微笑みを絶やさない
君の瞳に
心の中で口づけして
僕は明日出撃する
この赤いネッカチーフが
君の手元に届く頃
僕らは勝利の帰還に
祝盃をあげているだろう

もし楽しいことがあったら
この赤いネッカチーフを握りしめ
踊りあかしてくれ
もし悲しいことがあったら
この赤いネッカチーフで
君の涙をふいてくれ
もし君に
いつか子供ができたなら
この赤いネッカチーフを示して
自由と解放のために
血を流して戦い
死んでいった
戦士たちのことを
語り聞かせてくれ

一九七九・二・一五

片想い

女を捨てるといって
その長く美しい髪を
ためらいもなく切り捨てた君は
僕の熱い想い
銃を構える君は
勇ましく
銃を担って歩む君は
りりしく
銃を撃ちまくり
突撃する君は
雄々しく
そして振り向きもせず
去り行く君のうなじは
百合の花
僕の視線は熱く燃えて
君の後姿に追いすがる
アデュー
そして再会を

硝煙けぶる戦場で

一九七九・三・一一

戦いの歌

灼熱の太陽が降り注ぐ
切り立った岩肌の谷間に
戦いの歌が
朗々と朗々と響き渡る
出撃する戦士たちを送り出す
荘厳な
厳粛な
戦いの歌が
朗々と朗々と響き渡る
数千の戦士たちが
出撃する戦士も
残る戦士も
一体となって和する
その戦いの歌は
あたかも地の底から沸いてくる
地鳴りのように
大地の叫びのように
それはいつまでも鳴りやまず

出撃する戦士たちの
張りつめた心を鼓舞し
敵への怒りを燃え立たせる
私たちは続く
同志が切り拓いた道を踏みしめ
倒れし同志の屍(しかばね)のりこえ
倒れし同志の血に誓い
敵を撃ち滅ぼすその日まで
勝利をつかむその日まで
数千の戦士たちの歌声は
一体となって
岩肌にこだまし
谷底にこだまし
いつまでも鳴りやまぬ

一九七九・五・二六

訳詩　わが戦闘中の同志へ

奴ら死刑執行人の銃弾に
私は誇りたかくもたち向かう
さらば　わが戦闘中の同志よ
泣くな　わが戦闘に死すとも
さあ　わが殉死を手本とせよ

わが戦闘中の同志よ
不撓不屈の戦士よ
わが任務を君に托して私は逝く
私は自らの責任をまっとうした
同志よ　戦い続けてくれ
植民地主義を破壊し
そして搾取を終わらせる
その日まで

苦闘する姉妹よ
戦いにある姉妹よ
足並そろえてさあ進め

兄弟たちと腕結びて突き進め
そのことによってのみ
長く抑圧され続けてきたエリトリアの女性たちは
自らの権利を獲得して
解放されるのだ
そして新たなエリトリアが建設されるのだ

一九七九・三・二五訳

訳詩　殉死はわが人民の戦闘を突き動かす

われらが戦いの長びこうとも
われらが勝利は確実だ
われらは投獄も処刑も恐れはしない
耐え得ぬのはファシストどもの抑圧だ
たとえ革命家は死んでも
革命そのものは死にはしない
破壊なくして建設はないのだ

わが殉死者たちの屍を肥えにして
英雄たちの流した血を水源にして
新生エリトリアが
地平線上に現われる
叫べ　母たちよ！　声高らかに
歌え　自らの美しい歌を
掲げよ　われらが革命旗を
さあやってこい　人民のエリトリア！

一九七九・三・二五訳

蝗軍パートⅠ

夜明け
白み始める空
そしてにぶく響き渡るエンジンの音
数台の軍用トラックが
朝霧をついて土を蹴る
日本兵を満載したトラックが
前ぶれもなしに近づいてくる
日本兵
数えきれない日本兵
村を包囲して停止したトラックから
着剣して降りてくる日本兵
命令を下す将校連中
日本刀を抜き放ち
「散開・包囲」を命ずる将校連中
刺突の構えの日本兵
包囲をちじめる日本兵
安眠を妨げられた村民たち
突然の襲撃にとまどう村民たち

無防備の村民たち
なすすべもない村民たち
だがすぐ気をとりもどす村民たち
蛮声をはりあげて
一軒一軒戸をぶち破る日本兵
村民をひきずり出す日本兵
抵抗するものを刺し殺す日本兵
逃亡するものを撃ち殺す日本兵
二メートル間隔一列横隊に並んで
追い出した村民たちを
小高い丘の崖際へと追い立てる日本兵
ヨタヨタして歩けない老婆を
無表情に突き殺す日本兵
腹の大きな妊婦を
無表情に突き殺す日本兵
胎児を抉り出し
銃剣に串刺しする日本兵
母が子を呼ぶ叫びが
子が母を呼ぶ泣き声が
入り乱れ

反響し
それは阿鼻叫喚となって
村全体に充満した
機関銃の一斉射撃
密集させた村民に向けて
容赦なく銃弾を浴びせる日本兵
次々とくずおれる村民
こぶしをつき出し倒れる村民
カッと眼を見開いて倒れる村民
両手で頭をかかえて倒れる村民
子供を抱いたまま倒れる村民
とび出した内臓をおさえて倒れる村民
村民たちの血は川となって流れた
怒りに燃えて大地に流れた
われわれは決して忘れまい
蝗軍のこの凶行を
天皇の軍隊のこの残虐を
たとえ日本の滅ぶとも
たとえ日本民族の滅ぶとも
永遠に

蝗軍パートⅡ

空には雲一つなく
地には風一つない
けだるい八月の昼下り
人通りの絶えた広場
広場に面した連隊本部
広場を見下すカラスたち
一人の若い農民をひきたてた
一団の日本兵がやってくる
奴らは広場の中央の柱に
その若い農民を縛りつけた
その時広場に面した女郎部屋から
楊枝をくわえた一人の将校が出てきた
坊主頭に日の丸鉢巻きちっとしめて
ずんぐりむっくり赤ら顔
脂ぎったギョロギョロ目玉の将校は
日本刀をガチャつかせ
地面に向かってツバ吐いた
――八路か

いっちょためし切りやったろか
奴は広場中央の柱に
ゆっくりと近づいて
日本刀を抜き放ち
その若い農民を見下した
そのひきしまった体の農民は
そのあさ黒く陽に焼けた顔を
日本刀をふりかざす将校に
ごう然と向け上げて
自信たっぷりの鷹が
今にもエモノにとびかかろうとする時の
あの挑戦的なまなざしで
将校の赤ら顔をにらめつけ
ペッ
とツバを吐きかけた
思わぬ奇襲にたじろいだ将校は
手元をこきざみにふるわせて
屈辱でいっそう顔赤らめて
その屈辱を
一時でも早くたち切らん思いで
日本刀をふり下した
切断された切口から
血を吹き上げて
将校の足下にころげ落ちた
農民の首
それは胴から切り離されてもなお
生々とした眼で将校をにらみつけていた
未だ屈辱に身をふるわせている将校の
ふやけた赤ら顔をにらみつけていた
奴はあたかも悪夢を追い払うかのように
その若い農民の首を
広場の隅に向かって蹴り上げた
放物線を描いて
蹴り上げられた農民の首が
地面にドサッと落ちた時
広場を見下す木々に止っていた
数羽のカラスたちが
ものうい鳴き声を残して
一斉に飛び立った

一九七九・五・二九

蝗軍パートⅢ

外は雨
冷たく煙むる秋の雨
私は待つ
やっと手に入れた短剣枕に
無数の日本兵が吐き出した
精液と体臭でベトついた
すえた臭いの蒲団のなかで
私は奴の来るのを待っている
奴は来る
ずんぐりむっくり赤ら顔
坊主頭に日の丸鉢巻きちっとしめた
奴は蝗軍きっての憲兵隊長
数え切れない同胞たちを
切り殺し
撃ち殺し
焼き殺した
奴は血に飢えた兵隊天皇
ドアが開いて
奴は来る
酒臭い吐息をまき散らし
赤ら顔を酒でいっそう赤らめて
奴は入ってくるなり
蒲団はねのけ
軍服脱ぎ捨て
褌はずし
一物さらして
私の体に襲いかかる
奴は私の単衣をはぎりとり
腐った吐息を吹きつけて
私の股ぐらこじ開き
奴の顔をおしつけて
奴はそのぬめった舌で
私の太腿下腹部なめ回し
私の胸部へとなめ上げる
私は短剣を
蒲団の下に隠しておいた短剣を
すばやくとり出し
奴の左背中につき立てる

奴は身をふるわせて
こと切れ
そしてとめどなく
ぬめぬめした液体が
私の下腹部を流れゆく
外は雨
赤く煙むる秋の雨
そして私は立ち上がる
しっかりとした
足どりで

一九七九・五・三〇